

日本語における感情表出—「もう」の意味機能

Pragmatic Particle *moo* in Japanese: Between Mind and Heart

Katsue Akiba Reynolds

人間存在の質と意味にとって感情ほど重要な精神活動はない。

—スタンフォード哲学百科事典⁽¹⁾—

古来人間は感情の動物であると言われてきた。人間は「複雑で微妙な感情を経験する固有の能力」をもっており、動作や表情によって、あるいは、言語によって経験している感情を伝えようとするものである⁽²⁾。言語学は、これまで感情表現を積極的に扱ってこなかったが、ディスコース・プラグマティックスの視点からの研究が進んだ今、感情表現についての言語学的な研究がやりやすい環境ができています。ここでは、いわゆる副詞「もう」が情意度の高い文脈で使われる傾向があることに注目し、日本語における感情表現の問題に言語学の側からアクセスする道を拓きたい。

はじめに、「もう」は時制修飾の機能と情意機能を潜在させているとする意味潜在論的な仮説を提案する。次に、大学生どうしの会話（データA）に頻繁に使われている「もう」を詳細に観察し、「もう」がどのような文脈において情意性を帯びるのか検討する。さらに、「もう」の情意機能が大学生の会話におけるよりも際立った形で表れている例（データB＝テレビのニュース番組から取り出した感情的な場面の会話集）によって、「もう」が発話者の感情の高まりを表現する装置であることを確認する。最後に、「もう」の時制修飾機能と情意機能の関係性は、日本語固有のものではなく他の言語にも見られる現象であること、したがって、「もう」の研究は言語と感情の普遍的な理解に向けて役立つ可能性があることを示唆する。

1. 「もう」の多機能性—潜在する感情

いわゆる副詞「もう」は、日本語での日常会話に頻繁に現れる。しかし、

その意味機能は、きわめて複雑で曖昧である。「もう」のコミュニケーション機能は何か。Jakobson (1960) の言語 6 機能論から洞察を得よう。

Jakobson はコミュニケーションというのがどういう出来事であるか定義し、それをもとに言語の 6 機能—^{conative}働きかけ機能、^{phatic}交話機能、^{referential}指示機能、^{emotive}情意機能、^{poetic}詩的機能、^{metalinguistic}メタ言語機能—を提案した⁽³⁾。「もう」に関わっているのは^{emotive}情意機能である。Jakobson によれば、たいていの相互作用では、すべての、あるいは、複数の機能が同時に作用しているが、いずれかの機能が前面に出て他の機能がその背景にあることが多い。「アラ！」のような間投詞、「バカ!」「おめでとう！」などでは、情意機能が顕著である。「円が上がっているヨ」のような文では指示機能が顕著だが、発話者の感情が前面に出てくる可能性もある。Jakobson の機能論は、その後 Halliday (1975) の理論に、そして現代の語用論的研究における意味潜在理論に受け継がれていく⁽⁴⁾。意味潜在論的な視点からアプローチしていくと、「もう」の多義性、曖昧性を言語学的に説明することが可能になる。

「もう」は、深層において「時制機能」と「感情機能」をコアとする抽象的な意味、すなわち、意味潜在 (meaning potential) であると考える。「もう」の意味は、実際の使用に際して文脈によって選ばれ、表現され、理解されるのである。したがって、意味潜在論においては「文脈」の定義が重要になる。言語学的な文脈はもちろん、話者と聞き手の関係、会話場面状況、その社会的背景を含む広義の「文脈」を参照する必要がある。「もう」に関して言えば、とくに発話者の感情的なスタンスが重要である。ある時は述語部の時制モダリティを修飾する副詞として使われ、ある時は構文的な縛りから解放されて発話者の感情=心を伝える副詞として使われる。またある時は両方の機能が溶け合っていることもある。「意味潜在は常に流動しており、直面している状況に対応して創造的に使われる」(Ajimer 2013 : 18) ものなのである。「もう」のようなことばは、「ディスコース・マーカ―」「プラグマティック・マーカ―」「モダリティ・パーティクル」を始めとし、さまざまな呼び名を与えられているが、ここでは名付けにこだわらない。単に「副詞」と呼ぶこともあれば、ディスコース／プラグマティックスのレベルで機能す

る副詞という意味で「D/P 副詞」と呼ぶこともある。)

2. 「時間の「もう」」と「感情の「もう」」

国語辞書が「もう」の多機能性をどう扱っているか見よう。Goo 国語辞書の「もう」の項目は5つの用法をあげている⁽⁵⁾。

- ① 現に、ある事態に立ち至っているさま。また、ある動作が終わっているさま。もはや。既に。「一手遅れだ」「一子供ではない」「今泣いた鳥が一笑了」
- ② あとわずかの時間で、ある事態になるさま。まもなく。やがて。じきに。「一終わりますから、しばらくお待ちください」「一来るだろう」
- ③ 現にある事物・状態などに、同じものを付け加える気持ちを表す語。さらに。いま。「一ちょっとで車にひかれるところだった」「一方の靴下が見つからない」
- ④ (あとに打消しの語などを伴って) 同じ事をこれ以上繰り返したくないという気持ちを強調する語。二度とは。「一しませんが許してください」「戦争は一ごめんだ」
- ⑤ 自分の判断・感情などを強める気持ちを表す語。感動詞的にも用いる。まさに。なんとも。「これは一疑う余地のない事実だ」「嫌になっちゃうなあ、一」

(下線は筆者)

辞書解釈は、日本語使用者に「もう」の使い方についての目安を与えるためのものであって、理論的な解説ではない。言語と感情の問題を厳密に扱うために、辞書編纂者の観察したことがらを注意深く検討し、修正しておかなければならない。

①②の「もう」は、その文の時制の違いによって見かけの意味が違っただけで、基本的な意味特性は同じであると考えられる。事態(行動/状態)Aがくある時点(Tn)でBに変化した、あるいは、変化する>という前提を暗

示しつつ事態 B を叙述するとき、事態 B の時制を修飾するのが副詞「もう」である。変化の時点 (Tn) が過去の場合は「すでに」「もはや」という時間副詞に意味的に通じ、未来の場合は「間もなく」「じきに」「やがて」などの時間副詞と通じる。このパターンの「もう」を「^{temporal}時間の「もう」」と呼ぶことにする。「時間の「もう」」は、「すでに」や「間もなく」のような時間副詞とは、形態的に異質である。内部構造がまったくない、活用しない、きわめて短い、意味が不透明であるなど、最近の研究で particle と呼ばれているカテゴリーに匹敵するように思われる⁽⁶⁾。

③の「もう」は、①②④⑤の「もう」と韻律的な外形がまったく異なる。上昇調で発音されて「ちょっとで」や「片方」に続いていく一つのイントネーション単位を成している。この「もう」は「ちょっと」や「片方」から切り離せない。これに対して、①②④⑤の「もう」は下降調で発音され、「もう」の後にイントネーションの区切りがある⁽⁷⁾。このことは、「もう」が文構造から切り離されて独立したステータスをもち、どこにでも位置することができる D/P 副詞であることを示すものである。文中の語句を修飾したり強調したりするだけでなく、コミュニケーションの主役、発話者の感情状況を伝えることもできるのである。このことは、次節の例でも見るように、副詞「もう」について最初に注目すべき重要な特徴である。ここでの観察対象は D/P 副詞の「もう」である。

④の「もう」も、基本的には①②と同じ意味特性をもっているとした方が「もう」の使い方を一般的に捉えられる。否定語や否定の意味を含んだ述語(動詞・状態語句)、あるいは、述語を修飾する副詞をさらに修飾する副詞と捉えておこう。「同じ事をこれ以上繰り返したくないという気持ちを強調する語」という辞書解釈は、辞書の掲げている例文には適合するが、「もう…ない」という文の一般的な意味解釈としては明らかに不適切である。しかし、この否定語に係る「もう」に「気持ちを強調する」傾向があるという観察は注目し得る。ちなみに、①の例としてあげられた「もう子供ではない」は、④のパターンとして扱った方が一貫する。「もう…ない」の「もう」は、<ある時点 (Tn) 以降事態 A が $\bar{A}$ (A でない) に変わった、あるいは、変

わる>という意味では「時間の「もう」」であるが、否定的な発話にはその変化に対する発話者の気持ちを強調的に伝えるニュアンスを帯びる傾向が見られる。

⑤の「もう」は、情意機能にもっともレラヴァントである。「自分の判断・感情などを強める気持ちを表す語」「感動詞的にも用いられる」という辞書解説が意味するのは、この文脈の「もう」に情意機能がもっとも顕著に現われるということである。「感情の^{emotive}「もう」」と呼ぼう。

辞書の①②のように文脈によって「時間の「もう」」として具体化された「もう」も情意性を暗示する傾向があるが、意味潜在論的な考え方によれば、これは少しも不自然ではない。(1)のaとbを比較してみよう。

- (1) a. 12時過ぎだ。
- b. もう12時過ぎだ。

二つの文は、情報的には同じ意味である。しかし、aとbはまったく同義かというと、やはりニュアンスに違いがある。bは「時間の立つのが早い」と感じる発話者の気持ちを伝えてくる。「もう」には指示機能主体の文脈においても情意性を呼び込む性質があるのだと言えよう。このことは、第5節で述べるように、他言語にも見られる意味現象であるので注目しておきたい。

3. 大学生の会話における「もう」

「もう」は、実際に使われた時点で、どんな意味を帯び、どんなコミュニケーション機能を獲得するのだろうか。データAに現れた「もう」をいくつかの角度から検討してみよう。

データAは、3人の社会学者が録音シトランスクリプトした30分の会話32セットから26セットを入手、筆者の社会言語学のコースで使用できるようにローマ字でデジタル化したものである。今回はランダムに選んだ20セット、10時間分の会話を使用した⁽⁸⁾。「もう」が352例観察される。学生どうしの自然な相互作用の運用に「もう」が欠かせない要素だという証拠であろう。

3.1 「時間の「もう」」

D/P 副詞の「もう」は、ほとんどどこにでも位置することができると述べた。しかし、「時間の「もう」」は、統語論レベルの時制モダリティにも関与しているので「感情の「もう」」ほど位置が自由ではない。例 (2)～(5) のように「もう」と述語部が比較的近い距離に位置している必要がある。

(例文をあげるに際して、必要と思われる場合にはゴシック角括弧【】にコンテキストの説明をいれた。F は女子学生、M は男子学生の発話。同性どうしの会話の場合は、F1、F2、あるいは、M1、M2とした。会話助詞の「ネ」「サ」「ヨ」、ポーズ・フィラーはカタカナで示した。観察対象の「もう」は直線アンダーラインで、「もう」が修飾している語句は点線アンダーラインで示した。ターン中の(…)は、聞き取れなかった部分である。(2)、(4)のような記号は沈黙ポーズ、数字は沈黙のおよその秒数を示す。角括弧[]内は文脈がわかりやすいように筆者が補った。)

(2) M : 大学出たらもう22ですからネ。

(3) F : 同じ学科の子の中にアノもうお見合いの話とかでてるんですネ。

(4) M : もう [クラブに] 入りたくないから。

(5) F : 雨が降ると、もうサッカーとかできなくなっちゃうんだヨネ。

これらの文の「もう」はすべて「時間の「もう」」であり、直感的に言えば、もっとも基本的な「もう」である。しかし、(2) (3) と (4) (5) の間には微妙な違いがある。辞書が「気持ちを強調する」としているように、(4) (5) の「もう」には情意性のニュアンスが感じられるのである。

多少情意性が感じられる例も含めて、基本的に「時間の「もう」」と判断されるケースがデータ A には151ある。

3.2 「感情の「もう」」

事態の変化が前提とされていない文脈での「もう」は、情意度が高い。

(6) (7) を見てみよう。

(6) 【新宿歌舞伎町へ両親と夕食に出かけた時、女子学生は刈り上げっぱいヘアスタイルでズボンだった。変なお兄さんが「お兄さん、お兄さん」と声をかけてきた。振り向いたら「アッ、しまった」といって逃げていったという話。自分が男と見間違われたと思って傷ついたという。】

F : ああ、もう傷つくウ。

M : 歌舞伎町は、だけど家族では歩けないでしょう？

F : うん、すごい傷ついた。

(7) 【女子が相撲部の合宿部屋をたずねた時のはなし。相手は男子。】

F : 入ったらもうほんと「ううううっ」とかね、息がつまってナンカ
黴くさい匂いがもう、布団とか敷き散らしてあってネ。もう、で
半分押し入れに入ってるんだけど、ジトジトっていうか。で（笑
い）汚いの、ほんとに。

例 (6) の「ああ、もう傷つくウ」における「もう」は、「感情の「もう」」以外ではありえない。(7) では、相撲部合宿部屋の汚さに対する女子学生の辟易感^{disgust}が強調されている。こちらも、明らかに「感情の「もう」」である。

データ A は、初めて出合った学生どうしの会話集だから、(6) (7) ほどあからさまに感情を表現しているパッセージは少ない。たいていは、「ほんとに」「ぜんぜん」「すごく」「すげー」「どえらく」やオノマトペ副詞と共起し、副詞の意味機能を増幅する働きをしている。例をみよう。

(8) F : もうほんとに高校の時の友だち東京にいないでしょう。

(9) M : 女子大生とか、もうすげーまじめとか思いますヨ。

例 (8) の場合、「高校の時の友だちが東京にいない」事態 B は「高校の時

の友だちがいた」事態がある時点（Tn）で変化して「もう」いなくなってしまうという意味ではない。東京に出てきた時から変わっていない状態である。つまり、この「もう」は「時間の「もう」」ではなく、発話者の上京当時の心細さ（＝感情）を強調している「ほんとに」の意味をさらに強調する働きをしている。(9)も同様である。女子大生の真面目さに対してもった感慨の強調である。「もう」に続く「ほんとに」「ぜんぜん」などはいずれも描写されている事態を強調する副詞であり、「もう」がなくてもすでに情意性が伝わる内容になっている。「もう」が加わると、強調の意味が増幅される。

(10) (11) の会話例では、ある状況がオノマトペアによってヴィヴィッドに描写され、そこに「もう」が出てくる。オノマトペアは、人々の感覚からできたことば、漢語に比べると情意性の高い表現である。

- (10) 【女子大生が松田聖子の真似をして髪を切るのが流行だという。そういう女子学生に批判的な感情を抱いている女子学生と男子学生の会話。】

F：あれ（…）松田聖子が切ったからですヨ、あれは。

M：ああ、そうなんですネ。

F：ええ。

M：ひどい。

F：もうどんどん真似してます。

- (11) 【ネクラぶる文学部学生批判。女子大にもネクラがいるんですかと問う男子に女子学生が強調の口調で答えている場面。】

F：みんなで集まった時にわざわざ沈んでる人がいるんですヨネー。

あれはよくないですヨネー。

M：ああ、いますか、やっぱり。

F：います、います。もうずらずらいます、文学部って。

データ A には、このように「もう」が強調の副詞やオノマトペアと隣接

して使われている例が75例ある。「ほんとにもう」「もうほんとに」がとくに多い。

3.3 ^{afterthought} 補足追加の「もう」

文がいったん完結した後に補足追加される場合の「もう」とか「もう」だけでターンを形成している場合、情意性が前面に出てくる傾向がある。構文の縛りから解放された「もう」は、他の言語要素を修飾する副詞というよりは、発話者の感情の高まりを強く示唆する D/P 副詞として発話に独自の表情を与える。

(12) 【男性二人、お互いに同じ高校の出身であることがわかって驚く。】

M2：静岡ですか。

M1：静岡のニラヤマです。

M2：ニラヤマですヨ、僕も。

M1：え！ほんと！？

M2：ニラヤマだヨー。(一緒に笑う) やんなっちゃうナー、もう。

(13) 【バレなければ浮気してもいいかどうかが議論になっている。】

F：でも自分が浮気する可能性だってあるわけだからネ。

M：ぜったいしない、もう。浮気しなくなったら離婚する。

例(12)は、思いがけないめぐりあわせに驚いた二人。一緒に笑った後の「やんなっちゃうナー、もう」は、発話者が本当に「いやになっちゃう」意味ではなく、同郷の同じ高校の出身であったのだ、という感慨の表現であろう。例(13)の「もう」は将来の事態を約束する「時間の「もう」」であるが、辞書が説明していたように、「感情の「もう」」でもある。「時間の「もう」」は否定文の環境では情意性が高くなる傾向があるということはすでに述べた。とくにこの例では「ぜったいに」という強調の副詞が「しない」を修飾しているから、発話者の容易ならない意志＝感情が前面に出ている。

データ A では、補足追加の「もう」が17例観察された。外に「もう」だけでターンを構成している例が2例ある。

- (14) 【別のひととの会話でどんな話をしたか、女性問題について話したかが話題になっている。会話データ収集に際して示唆されたトピックの一つが女性問題であった。】

F1：婦人問題の話しました？

F2：うん、した。

F1：ぜんぜんしなくて。

F2：ほんと。

F1：もう（ウフフフ）。

「もう」の意味が文脈によって解釈されなければならない以上、単独で発話された「もう」は、意味ありげではあるが不透明である。

3.4 「もう」の繰り返し

繰り返すが、会話のどこにでも現れるのが副詞「もう」の特徴である。さらに、「もう」はまた、(14) (16) にみられるように、一つの文構造に「もう」が2度使われている例もある。

- (15) F：もう₁24、5でもう₂集中的にみんな結婚するから。

- (16) M1：最近、最近増えたっていうか、今そんな気がしますね、スパスパ吸うし。で、とくに働いてる人がよく吸うネ。デパートなんかでバイトするとネ< M2：エー>昼休みなんか、もう₁女の人がもう₂すごいですヨ。

例 (15) の「もう₁」「もう₂」は「結婚する」に係る「時間の「もう」」、(16) の「もう」はどちらも「すごい」に係る「感情の「もう」」のようである。

なぜ同一の文構造で「もう」が2度使われるのだろうか。意味潜在の「もう」は、「もう」が修飾する述語部によって具体的な意味を獲得するということであった。「もう」と「もう」が修飾する述語部との距離が大きくなると、「もう」は具体的な意味を十分獲得できない。「もう」の繰り返しは、「もう」と述語部との関係をつなぎ直して、「もう」の意味が希薄化するのを防ぐためのストラテジーではないか。データ A には、こうした「もう」の繰り返しが19例ある。

3.5 ポーズ・フィラーのような「もう」

時間の「もう」ではないが、「感情の「もう」」とも言い難い、意味の希薄な「もう」が外にもある。ポーズ・フィラーの「ナンカ」やメタ言語機能フレーズ（例：「なんていうか」「どういふのかなー」）と隣接共起している「もう」である。

- (17) 【ボート部の練習で青春を謳歌している男子と大学のクラブ活動に興味がない女子学生の会話。】

M：ウン、その場志向でやりたいものやると。

F：うーん。もうナンカ、そうだネー。ヤッパリ将来のこと考えてるからネー。

M：は一、ほんとに。

- (18) 【F1 はセックスに関してリベラル派、F2 は、保守派。】

F2：平気で肩とか組めますか？

F1：そんな段階でナンカもう平気だし。

F2：へー。

F1：だいたい知り合ったきっかけがまた（アハハ）。

F2：肩を組むことから、とか。

F1：じゃなくて、もうなんて言うの、もうナン、もっとなに、肉体的なのってぜんぜんないんですか？

(17) の女性は、ボート部活動に打ち込んでいる男性が「じゃ、あなたはやりたいものをやりたい時にやるという考えですね」というのに対してただちに反論するのを控えている。日本語会話の特徴である 対 立 回避^{confrontation}の原理が働いているのだろう⁽⁹⁾。まず「うーん」という肯定とも否定ともわからない間投詞で受けておいて、「ナンカ」「そうだねー」によって慎重に間をおいてから相手とは反対の現実的な考え方を伝える。(18) では、女性にとってまだまだタブーであるセックスがトピックになった。異性と肩を組むことすらとんでもないと思っている F2 に対して、キスする、ホテルに行くなど、大胆な異性関係の話をしたい F1 だが、一瞬迷う。いずれの会話にも、発話者の躊躇の気持ちが出ている。

こんな場面になぜ「もう」が使われるのだろうか。躊躇を表す「ナンカ」と「感情の「もう」」。矛盾しているように思われるが、会話の流れに違和感はない。データ A にはこのような「もう」が28例もある。

「もう」は「時制機能」と「感情機能」をコアとする意味潜在だということを思い出そう。「もう」の具体的な意味は、実際の言語使用において文脈によって選ばれ、表現され、理解されるという考え方である。そこに、躊躇は一種の感情であるという見方を重ねれば、なぜ「もう」が明らかな躊躇表現と隣接共起できるのか納得がいく。「もう」が躊躇の気持ち(=感情)を含んだポーズ・フィラーとして機能することもあるのだ。ニュアンスが微妙に異なる複数のポーズ・フィラーが隣接して使われる例は日本語の自然会話にいくらでもある。

最初に述べたように、人間の心には常に感情が潜んでいる。しかし、感情を生のまま表現することはできない。どんな感情をどのように伝えるか。文化によって、状況によって、人によって違う。文化的規範やその場の状況によって感情表現が抑えられることもある。表現したい意味にマッチすることばを思いつかないこともある。それでも、感情が普通以上に高まったとき、感情は言語体系の切れ目から漏れて出る。そんな発話者の感情状況を伝えるのが D/P 副詞「もう」なのかもしれない。「もう」は感情が潜在していることを思い出させる^{マーカー}標識なのだ。

データ A は、研究者に依頼されて集まった大学生たちの会話集である。未知の者どうしではあるが、東京の 4 年制大学に在籍しているほぼ同年齢の若者たちのごく自然な会話である。しかし、データ A のようなインフォーマント方式で収集されたコーパスでは、わたしたちの実際の言語生活にあるはずの感情的なディスコースを十分観察することはできないだろう。インフォーマントが本気で感情的になることは普通考えられない。感情言語を実証的に研究することが困難な由縁である。データ B は、報道目的のために記録され放映された自然言語場面の中から、発話者が感情を表現せずにはいられない場面、感情的であることが許され、期待されている場面を取りだしたものである。「もう」の機能がデータ A におけるよりも鮮明に立ち表れている。

4. 日本の感情的表現—「もう」

感情はきわめて文化的な現象である⁽¹⁰⁾。欧米のジャパノロジストたちは、日本人は自分の感情を表さないと指摘する。Hasada (2003) が示そうとしたように、たしかにそうした文化的傾向はある⁽¹¹⁾。だとすれば、「感情の「もう」」は、感情表出をコントロールされた文化的環境においてなお感情がある、感情が高まっていることを表すストラテジーとして重要な意味をもつ。感情表出を抑圧され、自らも抑制して日本人が日常の相互作用の中で発見した貴重な言語資源なのかもしれない。

最近のテレビ・ニュースでは、しばしば事件の関係者などとのインタビューを挿入する方式がとられる。ニュース以外にもインタビューを挿入した特集が組まれる。テレビカメラの前のインタビューイたちは、けっして無感情ではない。テレビはインフォーマント方式では採集し難い情意度の高い「もう」のサンプルを豊富に提供してくれる。毎日のニュース番組を録画し、感情的な場면을クリップしてみると、「感情の「もう」」が十分採集できる。

4.1 横田早紀江さんが拉致問題を語る時

2006 年 4 月横田早紀江さんが拉致問題の残酷さを訴えるスピーチを米国公

聴会で行った。下院議員のクリス・スミスが「愛と思いやりのもっとも素晴らしい、もっとも力強い証言であった」と評したスピーチである。読み上げる早紀江さんの声はきわめて感情の高ぶった声であった。事前に原稿を用意し、繰り返し練習したであろうアピール文には、「もう」は使われていない。公聴会前後早紀江さんはさまざまなメディアのインタビューを受けた。その際の彼女の答えは自然な発話である。「もう」の外に「ほんとに」が多いことに注目しておきたい。例（19）は2006年4月26日ハワイで放送されたNHK ニュースの一部である。

（19）

女性キャスター：横田さん、涙をぐーとこらえて証言されていましたが、
けれども、アノ事前のインタビューで「親の気持ちを伝えたい」と
も早紀江さんおっしゃっていましたが、いかがでした、それは
伝えることができましたかあ？

横田早紀江：はい。もう₁、わたしでは、全力を尽くしたつもりでござ
いますけども、アノーみなさんもう₂、ほんとに₁よくわかってい
ただいて、アノこの拉致問題というものが、ほんとに₂ アノー、
ただその親の悲しみだけでなく、アノー、もう₃世界中にとつて
も大変な問題を抱えている北朝鮮という国の、アノー、ことを、み
んなが考えなければならないっていうところまで、アノーいくよう
になったということはほんとに₃大きな収穫だったと思っています。

男性キャスター：証言の中で、めぐみさんが、船底で、壁をかきむしる
ようにして、というところがありますけれど、あの表現というのは
ご自身ことばにすること自体つらい（slow）部分じゃないかなーっ
ていう風にお見受けしたんですけれど。

横田早紀江：そうですね。もう₁あ、あれを初めに本で読んだ時は、も
う₂、アノー、もう₃、吐きそうになるほどのアノー、ショックであ
りましたけれども、もう₄、アノー、何とかして助けてあげるため
には、どんなことでもしなければならぬと思っていますので、ア

ノー、ひとつひとつ、アノー与えられた時間を大切に、精一杯やって行こうと思っていますので、アノあんまりそういうことを考えないでおります。

経験のある女性記者と男性記者が交代で質問している。インタビュワーたちのEI（心の知能）は非常に高い⁽¹²⁾。女性は、最後の質問文の「か」を引き延ばし上昇調で配慮深く発音している。男性インタビュワーは、横田さんにとって重い意味をもつ「つらい」ということばを1音節ずつ押し出すようにゆっくり発音した。横田さんはこれを受けて「そうですネ」と息を整えるが、公聴会の場面で読み上げた文章—その文章が思い出させる娘めぐみさんの苦しみ—が「吐きそうになるほどのショック」であったことを再び思い出して感情が高ぶり、すぐにはことばが出ない。そんなときに「もう」が出てくるのだ。＜もう₁、もう₂、アノー、もう₃＞と、横田さんの感情は躊躇いながらクレッシェンドしていく。人前でなければ泣き崩れてしまうのではないかと思わせるほど心は感情でいっぱいだ。「ほんとに」も彼女のディスコースの特徴だ。4度目の「もう」でデクレッシェンドに向かい、フィラーの「アノー」の助けをかりて平静さを取り戻していく。まさに「愛と思いやり」が結晶したすばらしい感情表出である。高まる感情エネルギーを「もう」によって抑制し、知と情をバランスよく表出している。

4.2 涙と「もう」

感情をことばだけで表現するのは難しい。インタビュイーたちの表情や動作が見られるのは、テレビ映像資料の利点である。例(20)は2008年12月5日、ホノルルで放映された井上元海軍大将とのインタビュー（NHKニュース特集）の一部。特攻について語った時に「涙ぐむ場面もあった」という。

(20)

井上元海軍大将：おそらく罪悪だということを考えたでしょう、しか

し国民として国家の戦争と決まれば、軍、コノーいわゆる国権というものの指図に従わなくちゃいけない。もう₁、涙の出るような、ソノ、ほんとに、もう₂ぎゅーっと身体が絞られるような苦しみです、わたしは。

「もう₁」以下「苦しみです」まで（点線アンダーライン）、元大将の声は力強いが震えている。「もう」によって抑制が緩み、「前途ある若者たちが死んでいくのを止められなかった悔恨の念」が吐露され、「涙の出るような」「ぎゅーっと身体を絞られるような苦しみ」であるという心の真実が語られる。

次の例（20）は、2009年4月俳優中村雅俊の記者会見。長男が大麻取締法の容疑で逮捕された翌日都内で行ったもの。涙の会見と言われた。

(21)

中村雅俊：やっ《2》このくらいやんないと《2》だめですヨ。もう
《4》これくらいやらないと《2》奴が、逆に《2》だめになりそ
うで《5》アン《1》ちゃんとした《15》するつもりです。

声が何度も途切れた。「もう」のあと（点線アンダーライン）、声が震えて消え入りそうになった。「ちゃんとした」の後は15秒間、涙だけだ。

例（22）は、5歳の幼稚園児二人が殺された事件があり、マイクを向けられた告別式参列の男性の反応。

(22)

告別式参列者：もう₁ネ、《1》涙が止まんない《2》可哀想で、ほん
とくにネ、もう₂、残されたみんなであげてあげたいというふうに
思います。

雨のなか傘をさして殺害現場に花をあげにきた女性は、ほとんど泣き崩れそうになり、「もう」だけが聞こえる。

4.3 喜びの「もう」

「もう」は、特定の感情の表現ではない。喜びの感情でいっぱいのおきも出てくる。映画『おくりびと』がアカデミー賞を受賞。出演者の広末涼子は、監督の滝田洋二郎らとともにハリウッドの会場で挨拶した。頬が紅潮している。「もう、ほんとにコングラチュレーションの嵐を浴びるように、エー今この場にたどり着きました」。

2006年のWBC、対メキシコ戦。日本はメキシコに勝てるか？ 期待が全国的に高まった。勝った！ テレビは、日本中が沸き上がっている様子を映し出した。「感情の「もう」」が次々に出てくる。喫茶店に集まって観戦していた若者たちは一瞬抱き合い、口々に大声をあげた。「もう、日本人でよかったー！」と飛び上がって喜ぶ若者がいた。別の会場で記者にマイクを向けられた学生風の若者は、興奮して言った。

(23)

若者：もう₁、優勝した時には、もう₂、マジ、もう₃、大声で叫びましたネ、世界一になったー、って。

「もう」が繰り返され、それに「マジ」が加わっている。「マジ」は「ほんとに」の若者言葉ヴァージョンだろう。

まだ緊張した面持ちのままの原監督もインタビューを受けた。

(24)

原監督：14、3 試合めに決められたっていうことはですネー、もう₁、監督、としてもホッとしているし、ここはもう₂、ファンのみなさんですネ、大いに喜びたい、と思います。ほんとにありがとうございます。

選手たちもインタビューを受けた。だれも表情は硬いが、喜びの気持ちは隠しきれない。「もう」が必ずと言っていいほど出てくる。

4.4 怒りや不満の「もう」

中古車販売所で自動車盗難があった。600万円かけてレース用に改造した高級車が盗まれた。店の男性は、防犯カメラに映った盗難現場を見て次のように答えている。

(25)

男性：もう₁、ほんと₁、いかりイのひとつことオですヨ。ほんと₂もう₂
《2》画面のなかに飛び込んで、もう₃《2》ほんと₃《2》捕まえてやりたいって気持ちでいっぱい…。

「もう」が3度、「ほんと」が3度。怒り心頭の場面である。

中国からの観光客を乗せたバスは何カ所かでトイレ休憩をする。添乗員（中国人）は遅れないでバスに帰ってくるように念を押すが、観光客たちは土産物店に走っていく。バス出発の時間。帰ってきていない客が一人いる。すぐに放送が流される。添乗員は、帰ってきた男性を見つけて言う。

(26) ⁽¹³⁾

添乗員：アア、今放送したばかりなのヨー。もう！。信じらんない。
観光客：(…)
添乗員：じゃ、出ますヨ。

添乗員の女性は、時間を守らない中国人観光客に対する腹立たしさを「もう！」一言で表現し、バスは何事もなかったかのように出発する。

4.5 「忘れたくない」

今年（2016年）9月初めに『大津波3.11未来への記憶』上映を知らせるメールが送られてきた⁽¹⁴⁾。添付されていた1分37秒のクリップを開けると、いきなり「もう」に出合った。悲劇の舞台となった南三陸町で写真館を営んでいるという佐藤さんが被災地風景を背にして話していた。津波が寄せる前

からその瞬間までをカメラに収めた人である。

(27)

佐藤さん：記憶はだんだんやっばり、なくなっていくと《2》思います。自分は、もう₁ソノー《2》忘れるのがいやなんで《2》もう₂《2》ことあるごとに《2》思い出そう思い出そうとしているんですネ。

ドキュメンタリーは、津波を経験した人たちの複雑な感情—絶望、怒り、恐れ、悲しみ、祈りなどなど—の記録である。経験しなかった人には理解できない複雑な感情。阪神大震災を経験したわたしは、気にもしていなかった時間の流れが地震によってぶっちぎられてしまうことの痛みがどんなものであるか、ことばでは説明できないが覚えている。佐藤さんは、涙を見せてもないし、表情にもとくに強い感情が表れてはいない。しかし、その複雑な感情を「忘れるのがいやで、思い出そう思い出そうとしている」という。「もう」から佐藤さんの心の内に閉じ込められた重いものが伝わってくる。

5. おわりに一言語文化比較に向けて

日本語ネイティブとしての直感を頼りに「もう」の事例を読み返し、聞き返ししながら、日本語の特殊性と普遍性について考えた。日本文学の英訳で有名なサイデンスティッカー氏がよく「日本語は英訳できないヨ」と言っていたことを思い出す。日本語を英語に翻訳することが難しいのは、文学的な日本語にかぎらない。日常言語にも例がいくらかでもある。「感情の「もう」」が一例だ。Mahasneh (2016) は、英語とアラビア語を「二つのかけ離れた言語 (two distant languages)」と捉え、とくにアラビア語の情意表現が英訳不可能であると論じている。日本語についても同じことが言える。

日本語の「もう」と英語の already を比較してみると、情意表現の英訳が困難であることがよくわかる。基本的な「時間の「もう」」を使った和文「もう12時過ぎだ」は、「It's already past 12 o'clock」と英訳でき、「もう」

は already の日本語相当語であるかのように見える。しかし、否定文の「もう子供ではない」における「もう」は、already に英訳できない。英訳するなら「(I) am no longer a child」ぐらいだろう。「感情の「もう」」は、まったく翻訳不可能だ。英語の already に対応するのは、「時間の「もう」」の基本的なパターンだけだ。興味深いのは、辞書に＜インフォーマルな英語では exasperation（憤慨）、impatience（いらつき）などの気持ちを強調する用法がある＞と説明されていることである。例として次のような文があげられている。

(27) Let's go already. (もう行こうよ)

(28) Be quiet already. (もう、静かにしなさいよ)

文の終わりに使われるだけで、多様な語法をもち、文のあちこちに何度でも使うことができる「もう」には比較にならないが、時間副詞 already が情意性を帯びた D/P 副詞に向かって用法を拡張していく傾向があるという事実を見逃してはいけなない。フランス語の déjà やイタリア語の già（どちらも英語の already に相当する副詞）にさまざまな D/P 副詞的語法が発達しているという研究があり、そこでも時制的モダリティと話し手の気持ちの強調との関連が論じられている⁽¹⁵⁾。ロマンス語に遡って歴史言語学的な研究もしている。日本語の「もう」についても歴史言語学的な研究が必要だと思う。わたしの出身地千葉県では、「すでに」の意味で「もう」ではなく「はあ」が使われていた。「感情の「もう」」のような語法はなかったかもしれない。茨城、神奈川、群馬、静岡でも「すでに」の意味で「はあ」が使われているという報告があり、記録もある⁽¹⁶⁾。「もう」は、近代化の歴史の中で標準語に組み込まれたと考えられそうだが、そもそもどこから来たのだろうか。方言はどんどん消えていく。「もう」の歴史言語学的な研究はやがて不可能になるだろう。

時制的モダリティを伝える副詞がなぜ、どのようにして話し手の感情の強調語として使われるようになるのか、多様な異言語間比較研究、歴史言語学研究が望まれる。このささやかな「もう」の研究が、日本語の情意表現研究

のきっかけになり、日本語の感情表現研究が世界の感情表現研究につながってくれればいいと思う。

注

- (1) Stanford Encyclopedia of Philosophy より。日本語訳は筆者。http://plato.stanford.edu/entries/emotion (2016年9月16日閲覧)
- (2) 引用箇所は Lindquist, Gendron & Satpute (2016) より。
- (3) 鈴木 (1981)、れいのるず (1991) に簡単な紹介がある。
- (4) Halliday (1975)、Norén & Linell (2007)。
- (5) Goo 国語辞書は小学館の『デジタル大辞泉』を搭載している。
- (6) Hansen & Strudsholm (2008) など。Longacre (1976) は、70年代すでに、アメリカ・インディアンの言語に現れる不可解な要素を ‘mystery’ particle (「謎の」パーティクル) と称し、いわゆる sentence grammar では説明不可能、ディスコース・レベルで観察する必要があると主張していた。
- (7) 日本語音韻論に詳しい永原浩行さんによれば、下降調の「もう」と上昇調の「もう」の違いは、アクセントの有無の問題だということだが、ここではわかりやすくイントネーションの違いとした。
- (8) 収集方法については江原他 (1984) 参照。
- (9) Lebra (1984)。
- (10) Wierzbicka (1999)。
- (11) Hasada (2003) は、Cultural Scripts という形式を使って、日本語文化の特徴の一つとしてそうした傾向が事実であることを示そうとした。
- (12) EI は Emotional Intelligence の頭文字。「心の知能」とも言われ、自己や他者の感情を知覚し、自分の感情を表現し抑制する能力のこと。
- (13) 「もう」だけで感情を表す例は、学生の会話でも少なかった。視聴者を意識したレポーターとのインタビューでは、たぶん使われることがないだろう。この例は、中国からの観光客が急増しているという状況を集めた番組で、日本語がネイティブ並みの添乗員が中国人観光客に向かって叱責のような意味で発話したものである。お客の方に通じたかどうかわからない。日本のテレビドラマでは、時々

見かける（例：『獣医さん、事件ですよ』）。録音録画という形で収集しにくい用例である。

(14) 2015年に日本各地で上映された。

(15) Hansen & Strudsholm (2008)。

(16) Weblio. <http://www.weblio.jp/content/はあ> (2016年11月2日閲覧)。

引用文献

- 江原由美子・好井裕明・山崎敬一 (1984) 「性差別のエスノメソドロロジー—対面的コミュニケーション状況における権力装置」現代社会学会議編『現代社会学』18 pp. 143-176 アカデミア出版会 (れいのるず = 秋葉かつえ編 (1993) 『女と日本語』(有信堂) に再録)
- 鈴木孝夫 (1981) 「「あいさつ」とは何か」文化庁編『ことばシリーズ14: あいさつと言葉』pp. 34-46 大蔵省印刷局
- れいのるず秋葉かつえ (1991) 「『言葉は男が支配する』を読む」『京都市婦人教育センターだより』20 pp. 4-13 京都市社会教育振興財団
- Ajimer, Karin (2013) *Understanding Pragmatic Markers: A Variational Pragmatic Approach*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Halliday, M.A.K. (1975) *Learning How to Mean: Explorations in the Development of Language*. London: Edward Arnold.
- Hansen, M-B. M. & Strudsholm, E. (2008) The semantics of particles: advantages of a contrastive and panchronic approach: a study of the polysemy of French déjà and Italian già. *Linguistics*, 46-3, pp. 471-505.
- Hasada, Rie (2003). “Cultural Script” on Japanese Attitude towards Emotion. 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』29 pp. 27-67 東京外国語大学留学生日本語教育センター
- Jakobson, Roman (1960). Closing Statement: Linguistics and Poetics. T.A. Sebeok (ed.) *Styles in Language*. pp. 350-357. Cambridge: MIT Press.
- Lebra, Takie Sugiyama (1984) Nonconfrontational Strategies for Management of Interpersonal Conflicts. In Krauss, Ellis S., Thomas P. Rohlen & Patricia G. Steinhoff (eds.),

- Conflict in Japan*. pp. 41–60. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Lindquist, K.A., Gendron, M. & Satpute, A.B. (2016) Language and emotion: Putting words into feelings and feelings into words. In Barrett, L.F., M. Lewis & J.M. Haviland-Jones (eds.), *Handbook of Emotions* (4th ed.). pp. 579–594. New York: Guilford.
- Longacre, Robert E. (1976) ‘Mystery’ Particles and Affixes. *Papers from the 12th Regional Meetings of the Chicago Linguistics Society*, pp. 468–475.
- Mahasneh, Anjad (2016) Arabic Language and Emotiveness’s Translation. *International Journal of Social Science and Humanity*, 6-4, pp. 268–274.
- Norén, K and P. Linell (2007) Meaning Potentials and the Interaction between Lexis and Contexts: An Empirical Substantiation. *Pragmatics*, 17-3 pp. 387–416.
- Wierzbicka, Anna (1999) *Emotions across Languages and Cultures: Diversity and Universals*. Cambridge: Cambridge University Press.

謝辞

Anna Wierzbicka の意味論研究について最初に教えてくれたのはハンガリー出身の言語研究者 Edith Moravcsik であった。広い視野をもち、世界の言語研究状況を的確に把握しているタイポロジストからの情報はありがたい。日本語音韻論に関して議論相手になってくれた永原浩行さんにも感謝したい。

(れいのるず あきば かつえ・ハワイ大学)